

お花見雑感

泉鏡花著

明治四十三年四月

四五年といふもの逗子の方へ行つてみたので、お花見には御無沙汰した。全體彼地では汐風が吹くせみか木が皆小さくて稀に二三株有つても色も褪せて居るやうだから、摘草などをこそすれつい／＼花を見る事は先すくないのである、と言つて花時に出ても来ないし、愈々以て遠々しくは成つたものゝ、何もお花見だからと言つて異装なんかする事はさう別に奨励するにも及ばなければ、恐しく取繋る事もないと思ふ。さうしなれば樂めないといふ譯もなし、普通の身装で普通の顔で、歡樂を擅にする事ができるのだから。

近來櫻花の下を通る女の風俗を見るに、どうも物足りない點がある、花に對する配合が悪い。たとへば上野なら上野で、清水の堂に、文金の高島田、紫の矢絰、といった美人が、銀地の扇か何か持つてゐるといふと、奈何にも色彩が榮えて配合そ

の宜しきを得てゐるが、これが今時のやうな風俗で
あると一寸と弱る、前述のやうだとお花見らしい上
野が見えると言ふもの。夫から上野にしる向島にし
る、そこらを歩いてゐる女達が、左程迄にゆかなく
つても、濃艶淡彩とり／＼に見えるけれど、此頃の
風俗ではバツと咲いてる櫻花の下に、女は唯黒ツぽ
く見えるばかり、打見たところ色が雜つて、或混氣
のない心持のよい色丈で、身装を飾るといふ事がで
きなくなつたらしく、色の上にはぼかしを掛けて、ぼ
かし過ぎた部分へまた白粉の極彩色、工手間のかゝ
つた、一刷毛で埒のあかぬ化粧ぶりは、造花に配し
たら見劣もしまいけれど、唯妙に薄黒く見えるので、
全體海老茶といふあの色がもう黒く見える。其他背
負上、帯の色、混沌たる色彩を爲して、二重にも三
重にも塗りつけた有様がある。そこで其色彩が、日
中の花盛砂埃を浴びて立つても水際立つて美しくあ
つて然るべきのが、ポーツと霞んで居る時に見ても
一向鮮かに見えぬ。

酒なくて何のおのれが櫻かな、で花にはいづれ附
物だが、ほんたうに花を見ようといふなら、明方の

櫻か、薄月でもあつて、一本の櫻がかう明いやうな所を見るにあると、言ふものゝ半ば御多分に漏れな
い、活きた花を見るのだが、陰氣な顔をして理窟を
言つたり、くすんだりして見るよりほ、派手に陽氣
に櫻と競つて花見をしたら、萬都の美觀を添へるだ
らうと思ふ。

要するに櫻の下に行交ふ女が黒つばいと言つて、
素人らしくないといふ意味では決してない。が何も
御自分勝手にさういふ風をなさるのも、異装をする
のも悪い事ではない。どんな事をして、お楽しみ
があれば夫でよい譯だが、庇髪に金ピカの三枚櫛な
んてものは、其上に櫻は決して調和したものではな
い。

たとへば第一歩く振なり容子なり、甚だ美しく
なくなつた。落花の黒髪にかゝる風情、袂や裾に散
る趣きも、今では皆がいきなり手を出して掴むぐら
ゐな意である。